

監修にあたって

柿本人麻呂、山部赤人、紀貫之、和泉式部、西行、藤原定家、本居宣長、良寛、正岡子規、佐佐木信綱、与謝野晶子、斎藤茂吉、北原白秋、若山牧水 e t c . . . 日本を代表する歌人たちも仰ぎ見てきた山——それが富士山です。ある歌人は二つとないという意味で「不二」と詠み、別の歌人は魅力や恩恵が尽きることはない山、という意味で「不尽」という言葉を用いて表現してきました。皆さんの国語の教科書に出てくる人なにもたくさんのお歌人が、富士山に思いを馳せ、富士山と向き合いながら短歌を詠んできたこと——それをぜひこの静岡で学生時代を過ごしている人たちにも知ってほしいと願っています。

春夏秋冬はもちろん、朝昼や夕暮れでも、見る場所や、仰ぐ人の心の状態によっても、富士山は全く違った表情を私たちに見せてくれます。雄大さや優しさ、美しさやたくましさ——あなたにはどんなふう今日の富士山が見えていますか？

本書を通じて、一首でも二首でも好きな短歌を見つけてください。そして、ぜひ一度、皆さん自身の言葉で富士山を短歌に詠んでみてください

い。本書の元となる『富士山百人一首』の選考委員を務めてくださった中西進、佐佐木幸綱、馬場あき子の各先生がた、刊行に御尽力くださりました静岡県関係部局の皆様、さらには静岡県教育委員会の皆様にもあらためて御礼の言葉を申し添えて、監修者の言葉とさせていただきます。

平成二十四年七月

歌人 田中章義

中学生・高校生の皆さんへ

この解説は、静岡県文化・観光部が発行した『富士山百人一首』に掲載された歌について、中学生・高校生の皆さんに親しんでもらえるよう作成したものです。

和歌というものは、本来それで完結しているものです。五七五七七の三十一文字をそれぞれがかみしめて感じ取ってもらえばよいものです。けれども、一般の人にとっては、文字数が限られているだけにどのような思いや情景を詠んでいるのか、分かりづらい歌があるのも事実です。また、歌人（作者）のほうも、限られた語に様々な思いを込めています。場合によっては、枕詞、序詞、掛詞、縁語、本歌取りなどの歌の技法や、歌枕など、ある語が呼び起こすイメージを理解していないと分からない場合もあります。

例えば、富士山の表記の仕方でも作者によって様々な工夫しています。字の用い方だけでも「ふじ」、「富士」、「不二」。峰をあらわす字も「ね」、「嶺」、「根」など。それぞれにその字を用いた作者の思いはあるはずですが、それを一つ一つ解説していたらきりがありません。

そこで、ここでは皆さんが歌を味わうための助けになるよう、「歌意」として歌の意味を、中学校の教科書で用いられるような言葉でなるべく簡潔にまとめました。元の歌をそのまま現代語訳したわけではありません。歌の技法については必要最小限しか触れていません。句切れや倒置法など、分かりやすくするために敢えて紹介しなかったところもあります。

「歌意」だけでは伝わりにくい部分を補うため、「鑑賞」として説明を加えました。その歌を楽しむ際の、一つのヒントとしてください。

どちらも一つの味わい方を示したものであり、異なる解釈ももちろん可能だと思います。歌を味わうには、味わう側の感性によるところも多いので、皆さんそれぞれの読み方で味わっていただければよいのです。この解説がそのためのきっかけになればと思います。

平成二十四年七月

静岡県総合教育センター学校支援担当参事

兼授業づくり支援課長 杉山 洋一